

マラウィの亜熱帯疎林における植生変化と人間活動

藤田知弘（京大院アジアアフリカ地域研究研究科）

はじめに

アフリカ大陸東南部にはミオンボ林とよばれる亜熱帯疎林が分布している。ミオンボ林ではアフリカの他地域同様、人口増加等に起因した森林減少が懸念されており、これに関し詳細な調査が求められている。森林減少の直接的な原因としては農地開拓や伐採、火入れ等が指摘されているが、これら人為による植生の種構成や更新への影響については不明な点が多いとされている。本研究では伐採と火入れに対する植生への影響を、特に植生の更新・動態に注目して明らかにすることを目的とする。調査はマラウィ北部 N 村において、2007 年 9 月～2008 年 3 月、同年 8 月～9 月に実施した。

結果と考察

N 村では住居用のレンガを燃焼乾燥する際に用いられる燃材として、多くの樹木が伐採されていた。また、同用途にはミオンボ林優占種である *Brachystegia* 属の大径木が多く用いられていた。伐採による植生への影響に注目すると、相対的に伐採圧が高い林分では遷移初期種の *Uapaca kirkiana* が優占していたことがわかった。一方、伐採が行われていない林分では *B.* 属が優占していた。これより調査村では強度の伐採により *B.* 属が優占する植生から *U. kirkiana* が優占する植生へと変化が生じていることが推測される。

N 村では乾季後半に家畜の飼料となる林床草本の成長を促す目的で火入れが行われており、ある林分では 1～2 年毎に繰り返されている。同林分では優占種である *B.* 属の小径木が非常に少なく、*U. kirkiana* の小径木が比較的多く生育していた。この原因として *B.* 属は耐火性が低いため、火入れによる新規加入制限が生じていることが推測される。一方、*U. kirkiana* は高い伸長成長などにより耐火性を獲得し、定着を可能としていると考えられる。しかし、定着した *U. kirkiana* は遷移初期種であるため、上層木に被圧され、十分な光資源が獲得できず、林冠への新規加入は制限されている可能性が高い。

以上より伐採・火入れが恒常的に行われている植生では変化した光環境への応答、耐火性の樹種ごとの差異により、ミオンボ林から *U. kirkiana* の優占する植生へと変化が生じることが示唆された。ただし、火入れのみが行われている植生では *U. kirkiana* は高い耐火性を背景に定着を可能とするが、遷移初期種ゆえに林冠への加入は制限されると考えられる。今後は人為の影響を長期的な遷移過程に位置づけるため、ミオンボ林における極相について議論が分かれるミオンボ林と常緑樹林の遷移上の関係を検討していく。

（連絡先：藤田知弘 tfujitaster@gmail.com）